

「三つ子の魂百まで」 その二

(2008.1.7)



前中央教育審議会々長の鳥居泰彦さんが、幼児教育雑誌の中で、「子どもを育てるといふことの大切さについて、日本人の考え方や日本の社会の仕組みが、憂いるべき方向に変質している」と述べていました。親子で接する事のできる折角の休日なのに、幼児施設に子どもを預けて二人だけで遊びに行ってしまう夫婦とか、深夜営業の店に幼い子を連れた若い親子が目立つという話を聞きます。

以前は、「三つ子の魂百まで」という言葉をよく耳にしましたが、最近あまり聞かれません。それより、かえて「三つ子の魂・・・うんぬん」は、三歳児神話とか、三歳までに人格が決まってしまうと言うのは、おどしであるとか、女性の社会進出を阻害する男女共同参画社会の足を引っ張る発言であるとも言います。勿論、女性の社会参加、能力の発揮は大切なことです。そのためにも、女性の就労支援、子育て支援を更に強化し、子ども達のための最善の子育て環境を作っていかなければなりません。

しかし、他の動物に比べて人間の子どもは未成熟で生まれます。親の厚い庇護がなければ育ちません。三歳位までがスキップの時です。この時代に、心、情操、意欲といった人間の最も大切なものが作られることが発達心理学、脳科学でも指摘されています。

そこで、最も大切なことは「親の愛」です。哺乳動物のことを英語ではマンマルと言うそうです。マンマー（母の乳）で育つ動物という意味です。お母さんに抱かれ、授乳・排泄物の処理に象徴される一連の親の愛で、子育てを始めます。子どもは、生存の欲求が満たされ、安定した中で「心」と「体」を育てます。安定した心を育て、乳離れ、自立に向かって、躰を行うようになります。それが少年期・青年期の健全な親離れ・子離れを可能にするのです。

人間としての基礎・基本である「心」「情緒」「情操」「意欲」「愛情」等は、乳幼児期の親の深い愛に包まれてこそ育ちます。やはり日本に昔から語り継がれてきた「三つ子の魂百まで」は守り継がれていかなければならないと思います。

今年も宜しくお願いします。



自分の力で生きる

(2008.2.1)



幼少期、優秀だったと言われた人が、自分で歩いていけなくなってしまうたり、行為の結果を予測できず犯罪に染まったりする例が後を断たない。元検事の堀田力さんが著書「人間力を育てる」の中で、犯罪者と向かい合ううちに、『この人は、子どもの頃どんな教育を受け、どんな育てられ方をしたのか』と考えるようになったという。「人間力」とは「自分の頭で考え、自分で目標を実現できる力」のことだ。

私の子ども時代は、どこの家庭でも子どもは5～6人いた。2～3人というのは少ない方だった。だから、親は子どもの将来に期待することはあっても、あまり深く子どもに干渉しなかった。というより、干渉できなかった。教育には熱心であっても、今ほど子どもの学歴や成績にはこだわらず、いつまでも子どもの面倒をみることもなかった。子どもも何とか早く自立をしようと努力した。そして、自立した子が、将来、親の面倒を見るのは当たり前であった。

子どもが少なくなった今では、どうしても親の目は一点に集中しがちだ。5～6人に分散していた期待や圧力は、反対に5～6倍に強まることになる。子どもは、学校ばかりか家庭でも厳しい評価にさらされる。常に親にとっての「良い子」にならなければならない。期待に応えることができる間は「良い子」でいられるが、とても疲れる。期待に沿えなくなると自分の居場所も希望も失い、自分さえ失うことがある。

学校と家庭は違うこと、親と子どもは違う人格であることを認識すべきである。家庭では、学校と違う基準で子どもの価値を認める機会を持ち、スポーツやキャンプ、旅行に出かけることなど、直接体験の中で自分に自信を持てるように育てたい。親の一面的な価値判断でなく、子どもの個性を認め、長所を見つけてあげたい。

又、子どもが少なくなった分、親子関係が濃密になり、子離れ、親離れが難しくなりがちである。何と「49歳までの未婚者」で、親から経済的援助を受けている人の割合は、男性で30%、女性で40%にもなる。更に、親に身の回りの世話をしてもらっている人は、男性で52%、女性で73%に上っている（人口問題研・全国家庭動向調査・平10年）。親に依存したままのparasite singleが増えている。親の面倒どころの話ではない。

子どもの人生は、親が決めることではない。親が決めるところに、子どもの人生は失なわれ悲劇が起こる。親は、子どもが自らの人生を決め、親から自立して、しっかりと歩んでいけるように、離れて見守ることが必要である。



達成感を味わう

(2008.3.1)



北竜台幼稚園のバスの運転手さんが、ホノルルマラソンに挑戦し、見事完走した。六十も半ばを過ぎてのフルマラソンである。凱旋の自慢話は、まるで子ども達が何かができるようになり、「見て見て、聞いて聞いて」と言う時と同じだと思った。実に生き生きとして嬉しそうであった。何で苦しそうに汗を滴らせ、息も絶え絶えにヨロヨロになってまで走るのかと思うが、ホノルルマラソンの参加者に、参加理由を尋ねたところ、圧倒的多数が「ゴールでの達成感・充実感を味わいたいから」「自己充実・自分への挑戦」を挙げていた。エベレストに挑戦したジョージ・マロリーが、「何故、山に登るんですか？」との質問に「そこに山があるから・・・」と答えたという。エベレストとなると、はなから挑戦する気にもなれないが、人は目の前に高くそびえる山があると、登ってみたいくなる。どんなに厳しく・辛く・苦しいことであっても挑戦したくなる。同じように、登頂した時の充実感が忘れられないのだろ。このことは、人が目標や夢を持つことの大切さを表しているように感じる。目標や夢がはっきりしていればいる程、チャレンジしやすいし努力しやすい。可能性があることが明確であればある程、困難を克服する意欲が持てる。しかし、人生の達成目標や夢は、マラソンや登山のように単純ではない。人生の目標はゴールがはっきりしている訳ではないし、ゴールまであとどの位が到達度か分からないことがある。又、他人との関係や諸条件が複雑にからみ合い、自分の意思だけではうまくいかないことがある。そんな状況でも、目標を明確に定め、一步一步クリアする度に、人生の充実感を味わいたいものである。それを支えるのは、やはり体力・気力・意欲・自信である。子ども達は、できなかった逆上がりや雲梯ができるようになったりすると、私が見せて欲しいと言っている訳ではないのに、「逆上がりできるよ。見せてあげる」と、私を鉄棒のところに引っ張り出す。皮がむけて痛々しそうな手のひらに、ハンカチを当ててまで、何度も何度も練習している姿を見ていると、登山やホノルルマラソンと同じだなと思う。子ども達は、できなかったことができるようになる度に、達成感・充実感を味わい「やればできる」と自尊感情を育て、生きる意欲を育てている。



こども達の楽園

(2008.4.8)



4月の幼稚園のねらい（目標）は、幼児理解—全面的受容—信頼関係の構築です。幼稚園は「子ども達の楽園」です。楽しくなければ「幼稚園」ではありません。

しかし、四月入園したばかりの子ども達の中には、泣きたいくらい不安と緊張で、身を硬くしている子もいます。思いつき大声で泣き、「こんなところイヤだ！お母さんと一緒にいい！」と暴れる子もいます。こんな時に、一番大切なことは幼児理解です。子ども達の思い、心を、しっかり理解し、全面的に受容することです。親と一緒に不安になって泣いたり、「泣くんじゃない！」と目をつり上げていると、子どもは一層不安になったり、目をつり上げて暴れるようになります。

自分の思いのままに泣けるなんて、素晴らしいと思いませんか？この時代にしか、こんなに泣けませぬ。「お母さんから離れて、見知らぬ、訳も分からない、うるさい奴らと一緒にされて、僕は不安で心細くてイヤなんだ」と思うのは当然です。「先生は優しいよ、お友達と一緒に遊べるようになると楽しいよ」と、伝えて下さい。

子ども達が一日でも早く、自分の心に折り合いを付け、それを自ら乗り越えることが大切です。幼稚園が楽しく思えるようになるまで、温かく待ちましょう。「泣きたいだけ泣いていいよ」と、ゆったりと受け入れ、にこやかに手をつないだり、見守ることです。子ども達はきっとすぐに、先生大好き、幼稚園大好き、と言ってくれるようになります。



笑わない赤ちゃん

(2008.5.2)



私には、どんな子でもすぐになついて微笑みを返してくれたり、抱きついてくる特殊な能力があると自負していた。事実、大概の子は微笑んでくれるし、すんなりと抱っこされる。私には子どもを引き付けるオーラがあると思っていた。しかし、それがそうでもないようである。先日、公園で遊んでいた小学校3年生位の女の子に気軽に声をかけたら、その子は険しい顔をして私を見つめ、顔を引きたらせてあわてて逃げるように去って行った。きっと家に帰って「あやしいおじさんに声を掛けられ、怖かった。」と言っているに違いない。ヘタをすると、「公園にヒゲをはやした不審者出沒！」と通報されてしまっているかも知れないと思った。イヤな世の中になったもんである。

私が声を掛けても逃げ出さず、ニッコリ微笑み返してくれたり、抱きついてくれるのは、人間不信になっていない乳幼児期の子だけである。周囲の愛情に包まれて育てている乳幼児期の子ども達は、元々、あやすとニッコリと反応するようになっている。

笑わない赤ちゃんが増えているという。「新生児微笑」と言って、元々赤ちゃんは自然にあやすと反応して、ニッコリ笑うようにプログラムに組み込まれて生まれてくると言われている。しかし、親や周囲の人々が、言葉掛けや笑顔を投げかけないと、反応するチャンスを失い笑わなくなる。元々組み込まれているプログラムが消滅してしまうことになる。そして、生きる意欲を失って、無反応になる。誰にも愛されていない、自分は生きていてもしょうがないと、反対にプログラミングされた子は、自分の殻の中に閉じ籠ったり、自傷行為に走ることもあるという。心の病気になった子を治療中に、抱きしめ、声を掛け続けたところ、周囲の人々との信頼関係を取り戻し、心の結びつきができ、回復したという記録もある。

エリクソンは、最も身近な親や家族との基本的な信頼感が、生きる意欲を育てると言っている。不安な時に、スキンシップや言葉であやしたりして、ストレス・欲求不満を解消してあげると、信頼関係ができ、生きる意欲を育む。不安・不快な状態をそのままにしておくと、乳幼児は諦め、生きていてもしょうがないと思うようになる。乳幼児期の原信頼は、生涯を通じて生命につながるものである。あやしまれても子ども達に言葉を掛け、手助けしていこう。



イマジネーション

(2008.6.2)



昨日まで仲の良い友達だったのに、集団で一人の人間に死に至るまで殴る蹴るの暴行を加える。殺された子どもの両親がどうしてなのか、理解に苦しんでいた。水戸の千波湖の白鳥が七羽も殺された。何故？ どうして、そんなことをするのかと考え込んでいると、中学生が犯人であった。心を暗くする。

優しくなければ人間ではない。「優しい」とは「人を憂いる」こと、人の立場に立って考えられること。思いやりとは、他人のことに思いをめぐらすこと。みんなで殴る、蹴るという行為をしたら、人を死に至らしめることが想像できないのか。仲の良い友達に死ぬほど殴られることの痛みが分からないのか。どんなに悔しく、辛い苦しい思いをして死んでいったのか、想像できないのか。白鳥も命があること、生きていること、棒で殴られれば痛み、恐怖があることに思い至らないのか。中学生・高校生にもなれば、そんな想像力が育っているはずである。

行為の結果について、思いをはせるようになるのが人間になることである。人間としての心が育って、初めて「知」が育つ。思考するとはそういうことである。子ども達の学力が低下しているという記事ばかりが目立っているが、果たしてそうであろうか。学力低下とは、格差が広がり、点数の低いところが平均点を下げているだけのことである。学校だけでは足りなく、塾に行かなければ追いつかないほど攻め立てられ、詰め込まれていては、思考力は育たない。あれやこれや思いを巡らし、想像する体験の中でこそ「知」が育つ。こんなことをしたら、どんな結果になるか、考え、予測すること、他者の立場に立って考えること、これこそ人間本来の「知」である。

自由にいろいろ考える力を育てることが大切である。幼少期に他の子と衝突し、自分の思いと他人の思いの違いを知ったり、自分と他人の痛みを伝え合うこと、衝突をどう回避したら良いか、どう調整するか、友達との遊びの中で、体験から思いやり、想像力が育つ。サッカーでは、仲間の動きに合わせてどうパスを出したら点に絡むか、どのようにドリブルしたら相手を抜けるか。泥ダンゴはどうしたら堅くて強くピカピカに光るか、砂場の山を高くするには、トンネルが崩れないようにするにはどうしたら良いか、全て思いを巡らし思考すること、想像することである。こんな体験が「知」の基礎になる。人間としての知の基礎がないところでは、後から本物の「知」は育たない。



歩こう、歩こう！

(2008.7.1)



梅雨の晴れ間に、子ども達と久し振りに散歩に出かけました。天気が良くて爽やかな日だったので、私も子ども達もうきうきしていました。「歩こう、歩こう、私は元気。歩くの大好き…」と歌も出てきて、最初は軽快でした。ところが、少し歩くと「疲れたー」「もう、歩きたくない～」と言う子が出てきました。気が付くと、よく転ぶ子が目立ちます。歩き方も上手くないー赤ちゃんのような歩き方、バランスの悪い子も目立ちました。車道と反対側の歩道の端のアスファルトの盛り上がったところを、平均台代わりに歩かせ「ここはジャングルの細道だから、落ちたらワニに食われてしまうぞ！」と私がワニになって歩かせました。子ども達は面白がって、一本道を歩いていました。日常生活の中で、子ども達は明らかに歩かなくなっているようです。

同じ頃、お父さんと一緒に登園した子に出会いました。私はお父さんが車で送って来たとはばかり思っ
て、「おはようー、今日はお父さんに送ってもらっていいなー」と声をかけると、「お父さんと歩いて来たんだ」と言いました。歩いて来るくらい近い、とまたまた思い込み、「お家は近いの？」と尋ねると、「橋を渡って川の向こうのお山の近く」そして「毎日、歩いて来る」と言いました。随分遠い所です。年に数回、子ども達を連れて遊びに行きますが、遠いので「行きたくないー！」と嫌がる子もいます。その子の幼稚園で遊んでいる姿を見ると、動きがとても良いのです。

子どもの時は、調整力が大切であると言います。調整力とは、自分の体を上手に動かす能力やバランスの良い動きです。それは脳や体の発達にとっても大切な能力です。人間が脳や体を飛躍的に発達させたのは、直立二足歩行をするようになってからです。背筋がしっかりと通った人間にするには、しっかりと歩かせなければなりません。

20数年前に卒園した子のお母さんから聞いた話を思い出しました。そのお母さんは、幼稚園に入園した時に決めたそうです。「四季折々の自然と街の移ろいの中で、野の花を摘み、小鳥のさえずり、風の音、行き交う人々とのふれあい、いろいろな経験を積み、3年間とても充実した園の行き帰りでした。私もこの子も、とても良い思い出を作ることができました」と言っていました。お金をかけて塾に通わせることより、手をかけ、時間をかけたこれぞ英才教育です。



対話と遊びと人間関係の喪失

(2008.9.1)



私は、子ども達とお話しをするのが大好きだ。思いがけない質問をされたり、思わず笑ってしまうような、子どもらしい話を聞いたり、大人では思いつかない発想にびっくりしたり、実に楽しいのである。

中国の金メダル候補ナンバーワンの選手が、ケガで途中放棄したところ、それまで大声援をおくっていた人々が、一斉に「国の恥だ！」とばかりに、攻撃に回った。ブログで、何を言っても名前は出てこない。無責任に一方通行に言いつばなしである。相手が見えないので、議論もできない。

東京での会議の行き帰りに、電車に乗った。前の席に座っていた8人の内、6人の人が携帯でピコピコやっていた。駅のホームでも、歩きながらピコピコやっている人が大勢いた。そこには直接の会話がな

い。8月に発表された学校基本調査では、不登校・引きこもりが更に増えているとのことである。子ども達の「人と関わる力」が弱くなっていると言われて久しい。学習指導要領にも、幼稚園教育要領にも、十数年前から「人と関わる力」が加えられた。しかし、人と関わる力は、ますます失われている。子ども達の世界から、遊びが奪われた時から、この現象が起きているように思う。遊びの中で、一緒に協力し合い、衝突したりして、言葉のやりとりを豊かにして、人と関わる楽しさ、辛さを体験し、どうしたら人と上手く関わっていけるか、身に着けていく。幼児教育は、良い環境の中で、子ども達が自主的・主体的に、環境に関わりながら、遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活の中で、直接体験を重ね、生涯に亘る人格形成の基礎を培う最も重要なものである。

ハーバードビジネススクールの学長が、トップビジネスマンの第一条件として挙げていたのが、「チームワーク」である。集団を、うまくまとめ、レベルアップしていく力だ。良い仕事をするには、人とうまくチームワークを組めない人間はダメである。議論し、良いものを生み出せなければダメである。直接人と話し合い、議論できない人も社会も発展しない。遊びの喪失 — 匿名社会 — 人間関係の喪失 — 不登校は、みんなリンクしている問題であるように思う。

しつけはみんなで！

(2008.10.1)



TVで、「子どものしつけ」についての特別番組がありました。小学校で、授業中に座ってられない子や、落ち着きのない子、身の回りのことを自分でできない子が目立つようになったようです。家庭での「しつけ」ができていないと考えている小学校の先生が大多数でした。他方、親は子どものしつけができていると思っている人が大多数でした。

このズレは「しつけ」についての理解のズレにあると思います。「躰」とは身を美しくと書く如く、美しい身のこなしができることです。子どもが人間として、スムーズに生活できるようにすること、簡単に言えば良い生活習慣を身に付けることです。朝起きて、両親、兄弟と「おはようございます」と挨拶し、顔を洗って、うがいをして、手を洗い、家事分担をして、朝食の食卓に向かい、手を合わせて「いただきます」をして・・・と、一日の生活をスムーズにできるようにすることです。それは、子ども達がこれから「人間」になっていくために、子ども達のために身に付けさせることであって、決して大人（教師や親）の都合の良い子どもにするためのものではありません。子どもが「大人」になって「社会人」として恥ずかしくないマナーを身に付け、あの人は「育ち」が良い、「しつけ」の良い家庭に育った人だと、思われるような人になって欲しいと願っています。

幼稚園では、偏食というより調理したものをほとんど食べられない子や、一口食べては食事中歩き回り、他の子にチョッカイをして食い散らかす子がいます。しかし、そんな子も少しずつ前進しています。ご家庭と一緒に、まずは食欲をつけること、そして、食事が楽しい、美味しいと感じさせるようにします。お母さん方の中には「しつけ」について、どうしたら良いか迷い、困っている方もいるでしょう。家庭と幼稚園が、子ども達のために一緒に「しつけ」を考え、実践して欲しいと願っています。

幼稚園では「あいさつ」「お片づけ」「脱いだ靴やスリッパを揃える」を自主的・主体的にできるように促しています。来客が、「ここの幼稚園の子ども達は、本当に気持の良い『あいさつ』ができますね」と、驚かれます。一事が万事と申します。「靴を揃える」とみんなが気持良いし、困らないということに気付きます。そのことは「お片づけ」や他の生活習慣に繋がっていきます。

是非、ご家庭でも一緒に実行して下さい。朝起きた時の「おはようございます」「いただきます」の挨拶を繰り返して行って下さい。子ども達にも、できるようになるまで「あいさつ」を促し続けて下さい。決して叱ってはいけません。「あいさつ」が返ってこない時は、残念ながら、小さな声でも、少しでも、「あいさつ」に近い反応があった時は、大いに嬉しそうに振舞って下さい。そして、まずは親と教師が、率先して実行していきましょう。



とても都合のいい「ゴメンネ！」

(2008.11.4)



園庭の隅で、女の子同士で何やらもめていた。そっと、近づいて聞き耳を立ててみた。A子ちゃんがB子ちゃんを「ゴメンネって言ったら、イイヨ！って言わなければいけないんだ」と非難攻撃していた。B子ちゃんも周囲の子ども達も、A子ちゃんの勢いに押され気味で、下を向いていた。A子ちゃんがB子ちゃんの使っていたものを奪って、それを抗議したB子ちゃんを突き飛ばし、B子ちゃんが泣き出した。周囲にいた子ども達がA子ちゃんを非難したところで、A子ちゃんが「ゴメンネ」と言ったが、B子ちゃんが納得しなかった。・・・というのが粗筋であった。

4歳になったC子ちゃんが、何かと「ゴメンネ」を連発していた。何か言うたびに語尾に「ゴメンネ」を付けるようになった。そして、「『ゴメンネ』って言ったんだから『イイヨ』って言わなければいけないんだ」と、相手の承認・納得を強要していた。そして、又、何か話す度にととても明るく軽い「ゴメンネ」を接尾語に付けていた。C子ちゃんにとっては、とても便利で都合の良い言葉を見つけたのであろう。

悪いのは大人である。悪さをした子ども達を、私のところへ連れて来て、「子ども達が謝っていますから、許してやって下さい」と余計なことを言う。私は困ってしまう。貴重な体験をととても軽いものにしてしまう。「イイヨ」が、失敗した行動の全てを認めてしまうことになることがある。花壇の花を抜いて遊んでいた子ども達を叱ったところ、「ゴメンナサイ」を連発され、「もうするんじゃないよ」と許しところ、すぐに明るく遊び始め、その数日後に、又同じことを繰り返された。今度は許さないと叱ったところ「ゴメンナサイ」を連発し「ゴメンナサイって謝っているのに」と抗議されたことがあった。前の叱り方が中途半端で軽く、イイヨ、イイヨと物分りの良い大人であったと反省した。

子ども達は、いつも悪いことをしたら、素直に「ごめんなさい」って謝ることを躰られている。そこまではいいのだが、本当に心から反省し悪いことをした、もう二度とこんなことはしないぞ、と自分の心に誓って、失敗から学ぶことが大切である。「ゴメンネ」の連発では中味が全く感じられないのである。

私は、そうは簡単に許さないことにしている。折角の大切な経験を大切にしたいからである。大概の悪さは全て認め、心の中では許していても、子ども達の前ではすぐには許さない。すぐに、聞き分けの良い優しい大人になって「イイヨ、イイヨ」などと、簡単に言わない。深く反省し、二度とこんなことはしないぞと、貴重な体験を大切にさせたいからである。



子育て支援

(2008.12.1)



先日、温泉に行った時のことである。着いてすぐに大浴場に行った。周囲を見回して、「アッ」と驚いた。私を含めて大人が5人いたが、なんとその内3人が赤ちゃんを抱えていた。決して、私が女性用の大浴場に、間違えて入って「アッ」と驚いた訳ではない。みんな30代の体の大きな若いお父さんだった。赤ちゃんは、お父さんの片方の手に、ゆったりと抱きかかえられていた。お父さんは、大事に、丁寧に赤ちゃんの体を洗いながら、時折、何か言葉をかけて、あやしていた。湯船では、両手のひらに赤ちゃんをのせ、楽しそうに湯につかっているお父さんがいた。私は、自分の体を洗うのも忘れ、呆然と眺めながら感心していた。そして、時代は変わったこと、女湯では若いお母さんが、手足を思い切り伸ばして、ゆったりのおんびり温泉を楽しんでいるだろうこと、今の若い夫婦の家庭を思い描いていた。私も子供が大好き、育児は好きだが、ああはいかない。今の若いお父さんは偉い！と敬意の念やら、自らを恥じるような、情けないような、私達のオジンの世代とは違う人種を見るような、とても複雑な気持ちになってしまった。

「子どもと家庭のために働いているんだ」という錦の御旗を立てて、家庭を省みず、「オレが食わしてやってるんだ！」と威張り腐っていたのが、団塊の世代以前のお父さん達である。今では、そんなことを言っていたら、誰も相手にしてくれず、定年離婚でもされて、孤独な老後が待っているだけになってしまう。子育て誌の記者が、「以前は夫への不満を書いてくる人が多かったが、今ではほとんどいない」と話していた。

少子化の原因の一つ、夫が育児に協力しないということは、若い夫婦の家庭の中では解決している。すると、原因の多くは、今の社会状況の中にあることになる。そして、今の社会を作ってきたのが、威張っていた昔のお父さん方である。政治家にしろ、官僚にしろ、みんな昔のお父さんである。女性や母親の立場に立って、考えることはできない。「子育ては女の仕事」と、心の底では思っている人達に、子育て支援、少子化対策などできるわけがない。若いお母さん方は、若い男性を変える力があつた。今度は、社会を変える時である。もっと怒り、自分達の主張をぶっつけ、子育てしやすい社会を、自ら作り出すべきである。

